

要 旨

外国語活動の指導において、相手を大切に、相手を受け止めようとする態度に支えられた関わりのことを相手意識のある関わりだと捉えた。研究では、「聴きたい・伝えたい」と思えるような内容を設定し、目指す関わりの姿を「いいねポイント表」を示して共有化させることにより、相手意識のある関わりが生まれてきている。このような関わりの積み重ねから、自他の理解が深まり、相手を受け止めようとする態度が育ってきた。

<キーワード> ①相手意識 ②聴く ③いいねポイント

1 研究の目標

進んで人と関わろうとする児童を育成するために、外国語活動における関わりの中で相手意識を高めていくための指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

現代社会は、急速に情報のグローバル化が進んでいる。顔を合わせなくても様々な情報や考えを、世界に向けて発信したり、受信したりできるようになった。また、子どもの世界においては、少子化や環境の変化に伴い、群れて遊ぶ姿を地域で見かけることが少なくなった。かつては、群れ遊びの中で、相手の気持ちを汲んだり、自分の気持ちを伝えたりすることを体験していた。そのような機会を失いつつある今、相手意識をもって気持ちを交わすことが難しくなり、その結果、人との関わりがうまくできなかつたり、ささいなことからけんかが生じたりするケースも少なくない。そのような現状からも、言葉を介して人とつながる楽しさを体験することが必要だと考える。

学習指導要領外国語活動の目標には「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」¹⁾と記してある。外国語活動は「外国語を通じて」という特有な方法であるため、母語では改めて交わさないような内容についても互いに伝え合い、相手の新しい一面を知ることができる。また、言葉だけでなく相手の表情を見て思いを受け取ったり、身振り手振りを使って自分の思いを表現したりすることが必要になる。つまり、言葉だけのやりとりではなく、そこには、互いに心から相手に向き合って聴くことによる気持ちのやりとりが生まれる。これが、進んで人と関わろうとする児童の姿であると考え。「きく」には様々な意味があり、「聞く」は自然に聞こえてくる音を聞くこと、「聴く」はより相手に心に向け能動的に聴く、つまり、傾聴の姿である。人とふれあい、その楽しさを感じる体験の積み重ねから、相手を大切にすることを意識した関わりができるようになると考え。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、互いに相手意識をもって聴くような体験の積み重ねが自他の理解を深めることとなると考え、本目標を設定し、研究を進めることとした。

3 研究の仮説

外国語活動における目指す関わりの姿を明確にして、相手のことを聞いたり自分のことを伝えたりしようとする思いが、段階的に高まるような単元構成と評価を行えば、相手を受け止めようとする態度を育てることができるであろう。

4 研究方法

- (1) コミュニケーションの在り方についての先行研究や文献等を基にした情報収集や理論研究
- (2) 人との関わりに関する児童の実態を調査・分析し、それを基にした活動内容や単元構成の工夫
- (3) 授業実践により手立ての有効性についての検証

5 研究内容

- (1) 小学校学習指導要領解説外国語編や“Hi, friends 2”指導資料、先行研究、その他の文献を基に情報収集や理論研究を行う。
- (2) 事前に人との関わりに関するアンケートを行い、その結果を分析し、単元構成や活動の工夫の基礎資料とする。事後アンケートと授業における児童の活動の様子を分析し、意欲や態度の変容を見る。
- (3) 所属校6年生における“Hi, friends 2” Lesson 6「一日の生活を紹介しよう」、Lesson 8「夢宣言をしよう」において、各3時間の授業実践を行い、仮説を検証し、手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

ア 外国語活動で育てたい「動機づけ」と「人と関わる力」

金森は、「スキル(英語力)の器の両側を支える部分がとても重要です。ここには外国語を学ぶ『動機づけ』と『人と関わりながら自己表現を楽しむ態度』が入っています。この両方がしっかりと支えとして存在していないと、スキル(英語力)の器は不安定になり倒れてしまうのです」²⁾と述べている(図1)。

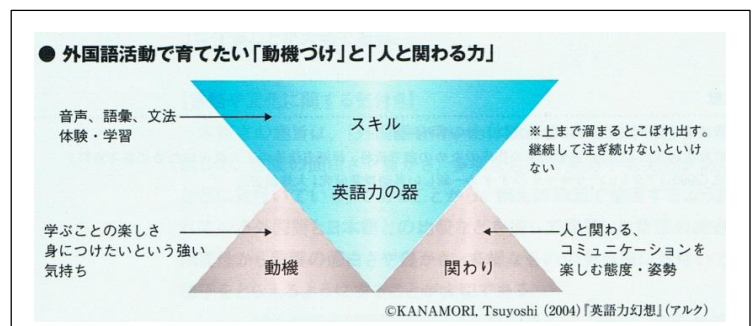


図1 外国語で育てたい「動機づけ」と「人と関わる力」

イ 「コミュニケーションの質」を意識した人間関係

金森は、「自分の発話に友達が耳を傾け、自分が受け止められていると感じるとき、子どもたちはコミュニケーションの意義に気づくかもしれません。友達の話に耳を傾ける姿をほめたり、友達との関わりを通して自分の存在意義を感じたり、関わることの楽しさを知ったりできれば、教室が安心して学べる場所になるはずです」³⁾と述べている。

ウ 「聞く」活動から「聴く」活動につながる単元構成

金森は、「外国語で子どもが情報を受け取る際は、場面や文脈を得るための『聞く』活動から始め、必要な情報を得るための『聴く』活動へとつなげます。(…中略…)このとき、受け取る内容が『心』を動かすものであってこそ、発信へとつながるわけですから、聞く内容は子どもたちの身近で興味のある話題である必要があります」⁴⁾と述べている。

エ 評価を通した学びの形成

金森は、「評価規準を設定することで、指導者が授業の中で求める児童の具体的な姿とともに、どう指導すればよいか明確になると同時に、児童にとっては各単元、各授業等でどのような力をつけるかが明確になり、授業に意欲的に取り組む契機となる」⁵⁾と述べている。

これらを受けて、「心」を動かすような内容を設定し「聞く」活動から「聴く」活動へつながるように段階的に単元を構成する。その単元を通して、友達の話に耳を傾けている姿のように、相手のことを大切にしている姿を児童に示し、相手のことを聞いたり自分のことを伝え

たりしようとすることを評価すれば、相手を受け止めようとする態度を育てることができると考えた。

(2) 児童の実態把握

事前に「外国語活動に関する意識調査」を行った。「友達と関わることは楽しい」では、「思う」は76%(19人)、「だいたいそう思う」は20%(5人)、「あまり思わない」は4%(1人)で、「ジェスチャーなどを使って関わる」では、「思う」は32%(8人)、「だいたいそう思う」は44%(11人)、「あまり思わない」24%(6人)であった。「自分から進んで相手のことを聞こうとする」では、「思う」は24%(4人)、「だいたいそう思う」は44%(11人)、「あまり思わない」は28%(7人)、「思わない」は4%(1人)であった。この結果から相手と関わる楽しさは感じているが、相手のことを聞いたり伝えたりしようとすることに消極的であることがうかがえる。

(3) 研究の構想について

本研究は、単元を通して、相手意識が高まるよう単元構成と評価に留意し、進んで人と関わろうとする児童を育成しようとするものである(図2)。

ア 「聞く」から「聴く」へとつながる単元構成

単元構成は、自然に聞こえてくる音を聞くことである聞く活動からより相手に向き合って聴くことによる聴く活動へつながるようにする。そこで取り上げる内容は、児童にとって身近で推測しやすい先生や友達のことにする。初めは、簡単なやりとりで予想しながら聞くことができるような表

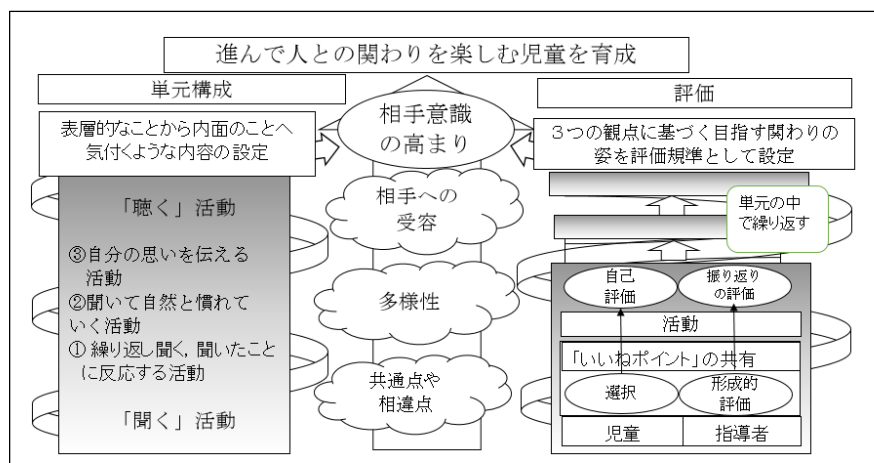


図2 研究の全体構想

層的な内容を扱う。それが、単元が進むとともに、もっと自分の思いを伝えたり、もっと相手の思いを知ったりしたいと思うような、その人の内面に迫っていく内容を扱う。つまり、「聴きたい、伝えたい」と心を動かし、相手のことが段階的に分かるような内容へと深めていく。そこで単元を①「繰り返し聞く、聞いたことに反応する活動」、②「聞いて自然と慣れていく活動」、③「自分の思いを伝える活動」と3つの段階で構成する。単元が進むにつれて、①繰り返し聞く、聞いたことに反応する活動の割合から、次第に③自分の思いを伝える活動の割合が増えていくようにし、児童が安心して自分のことを表現できるようにする。このように、単元を構成することで、相手のことを知りたい気持ちと慣れ親しんだ表現を使って伝えようとする気持ちを高めることができる考える。

イ いいねポイントとして共有化する評価規準

児童には、外国語活動の評価の3観点「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に対する気付き」に沿って、目指す関わりの姿を目に見える評価規準として表したものをいいねポイントとして示す。検証授業①(11月)では、「目を見る」「わかりやすく伝える」などの様相を、児童と共に表にまとめた。検証授業②(2月)では、それを整理し、児童が取り組みやすい項目から順に系統立て、評価規準表として児童と共有できるようにした。外語活動の評価の3観点といいねポイント表でそれぞれ対応させた観点は「コミュニ

ケーションへの関心・意欲・態度」と「相手と向き合う」、「外国語への慣れ親しみ」と「伝え合う」、「言語や文化に対する気付き」と「相手を知る」である(図3)。

指導者は毎時間のめあてに沿って、評価の観点を「相手と向き合う」「伝え合う」「相手を知る」から決定する。「相手と向き合う」を指導者が決定した場合は「目を見る」「笑顔」「うなづく」「考えながら」の項目から自分のめあてを児童に選択させる。その際、児童は自分に合わせて、系統立てた項目から選択できるようにする。指導者は活動前、活動中、活動後にめあてに沿って関わっている児童に「よく相手の目を見て話しかけていたね」「うなづいて聞いているから相手は話しやすいね」「ジェスチャーを使っているからよく伝わるね」などの言葉かけをしながら評価をしていく。このように、目指す具体的な関わりの姿を全体で共有することで、

児童の相手意識を高めさせることができると考える。また、毎時間の振り返りカードには、自分が選択したいいねポイントを記入させ、自己評価と関わりの中で感じたことを言葉に表現させる。体験したことを振り返らせることが、活動への達成感と次への意欲付けになると考える。

(4) 授業の実際と考察

ア 学級全体の児童の様相と考察

(ア) 「きく」の段階の移行に伴う相手意識の変容

検証授業②(2月)では“Hi, Friends 2” Lesson 8「夢宣言をしよう」をアレンジし、単元全体を通して、相手のことが段階的に分かるような活動内容と自然に表現に慣れ親しめるような構成にした(図4)。まず、単元のゴール像を明らかにするために、指導者のスピーチで小さい頃になりたかった職業を示したり、“Hi, Friends 2”のLet's Listenにおいて、どんな

いいねポイント ()		
相手と向き合う	伝え合う	相手を知る
目を見る 	聞きなれる 	相手のことがわかる
笑顔 	話そうとする 	自分と比べる
うなづく 	わかりやすく伝える 	相手のよさがわかる
考えながら きく 	やりとりをつづける 	

図3 いいねポイント表

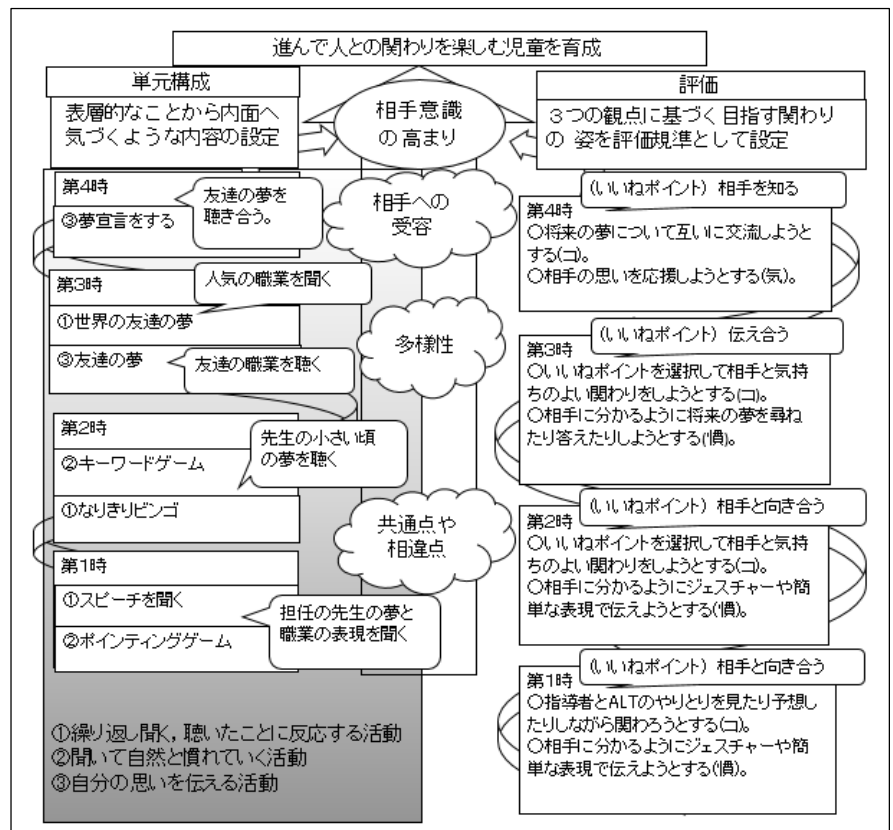


図4 検証授業②(2月)の単元の全体構想

職業に就きたいかをインタビューするやりとりを聞かせたりし、児童の終末での活動のイメージを膨らませるようにした。また、相手を大切にし、相手を受け止めようとする態度に支えられる関わりになるように“Hi, Friends 2”を聞かせるときは、互いを思いやった“Thank you.” “Good dream.”などを意識させた。この単元では、児童の将来の夢を伝え合うために、事前に児童の夢を調査し、その語彙を扱った。

第1時では、その職業の言い方に慣れ親しめるよう聞く活動を多く取り入れた。①繰り返し聞く、聞いたことに反応する活動として担任の先生とALTの小さい頃の夢を聞かせたり、②聞いて自然と慣れていく活動としてポインティングゲームやチャンツをしたりした。身近な先生の夢を知ること、相手を知る楽しさを感じている様子が分かる(表1下線部)。

第2時では、対象を広げ校内の先生方の小さい頃の夢を題材とした。第1時では扱わなかった語彙も出てきたため、②の活動として、聞いて自然と慣れていくキーワードゲームを行った。そこで慣れ親しんだ表現を使って、相手のことを聞く必然性をもたせるために、「なりきりビンゴ」を行った。これは、児童が9人の先生方を選び、その先生が小さい頃どんな夢を持っていたのかを予想させるものである。児童は、「〇〇先生なら多分“baseball player”だよ」など相手のことを考えながら楽しく予想していた。そして、正解を知らせる場面では、正解の職業を書いた紙を見て、その先生になりきって発表した。安心して話せるようにペアで活動させたり、分からないときはジェスチャーや日本語でもいいと話したりするなど、児童の負担にならないようにした。児童の振り返りを見ると、「わたしと同じ夢の先生がいた」「夢が叶うようになりたい」と自分と比べて考える児童がいた(表1下線部)。「親戚の人にも小さい頃の夢をきいてみたい」と相手を知る楽しさを広げようとする姿も見られた。

第3時では、更に対象を広げ、自分たちと同じ世界の小学生の将来の夢を扱った。①繰り返し聞く、聞いたことに反応する活動であるが、日本と韓国、フィンランドと国名を知らせ、その国の小学生に人気の職業だと話してランキングを行うことで、児童はどの国なのか予想しながら聞くことができた。その後の活動では、対象を身近な友達にし、誰の夢なのかを考える「誰の夢ゲーム」を行った。これが初めて児童が相手に尋ねる活動、③自分の思いを伝える活動である。友達の職業名“cook”などのカードを渡し、友達の将来の夢を予想して、その相手に質問する。予想させる相手は、日常での関わりが少ない相手を指導者側で意図的に決め、分からないからこそ児童の聴きたいという思いを高められるようにした。振り返りカードには「cookになるために大阪に行く」と話してくれた。すごいと思う」のように、自分で尋ねたことで分かった友達の夢にわくわくしている様子や「みんなの夢が叶うといいな」のように認め合う様子、さらには、「〇〇くんの夢の理由を知りたい」と相手の話をもっと聴きたいという思いが高まっていった(表1下線部)。

第4時は、友達の夢を聴きたいという思いと自分の夢を伝えたいという思いを「夢宣言をしよう」で表現させた。これは、③自分の思いを伝える活動である。なぜその夢を叶えたいのか、その職業になってどんなことをしたいのかを道具などを見せながら宣言させた。相手の話をじっくりと聴き合えるよう、グループの形態で活動をした。夢宣言を聴くだけでなく、聴き

表1 児童の振り返りカードの記述

	振り返りの記述
第1時	<ul style="list-style-type: none"> 先生の話をちゃんと聞くと英語でも<u>なんとなく話</u>が分かって、少し嬉しくなる。 わたしがなりたい職業の言い方を知った。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> わたしと同じ夢の先生がいた。 わたしも夢が本当になるようにがんばりたい。 親戚の人にも小さい頃の夢を聞いてみたい。
第3時	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇ちゃんは <u>cook になるために大阪に行く</u>と話してくれた。すごいと思う。 みんなの夢がかなうといいな。 〇〇くんの夢の理由を知りたい。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんが店を開いたらぜひ行きたい。 みんなとてもいい夢だった。その理由もわかった。 自分の夢を<u>発表</u>できた。叶うようにがんばりたい。

手がことばを受け止め、双方向のやりとりとなるように、相手の話を聴いてもっと知りたい場合には質問をしてよいこと、相手の夢を聴いたら “Good dream. ” などのことばを返し、話し手は “Thank you. ” などのお礼を伝えること、そして、相手に応援メッセージを書いて渡すようにした。そうすることで、児童の聴く意識が高まり、一心に聴こうとする雰囲気生まれた。夢の理由を尋ねるだけというパターン化されたやりとりだけでなく、知りたいと思ったことを質問できるような関わりが生まれるやりとりを行ったことにより、相手への思いを込めたメッセージを記すことができていた。

この時間の最後には、代表の児童が、みんなに知らせたい夢を宣言した。みんなで “Hello. ” と話しかけるとその児童は、 “Hello. ” と答えた。 “What do you want to be?” の質問に “I want to be a singer. ” 「世界中の人に元気や勇気を届けたいからです」とその理由を力強く述べた。そして、夢を語るためにもってきた新しい自分のギターを奏で、その思いを伝えることができた。

児童の振り返りには「みんなとてもいい夢だった。その理由もわかった」と相手の話を聴いて受け止めている様子や「〇〇さんが店を開いたらぜひ行きたい」と双方向のやりとりができたことにより話題が広がり、相手に心を寄せている様子が分かる。そして、「自分の夢を発表できた。叶うようにがんばりたい」と相手に思いを伝えることができた自分に自信をもっている様子うかがえる(前頁表 1 下線部)。

検証授業①(11月)事前、授業②(2月)事前、検証授業②(2月)事後の意識調査を見ると、「もっといろいろな人と話したい」は、「思う」の割合が増えている(図5)。相手を理解する楽しさを感じるようになっていく。

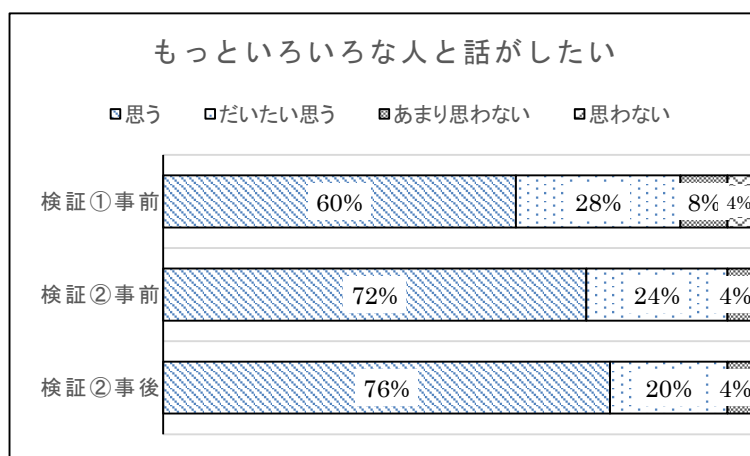


図5 アンケートの結果①

これらのことから、単元を通して「きく」段階の移行を行い、自然に表現に慣れ親しみながら関わったこと、併せて、相手への気付きが深まるような内容を設定したことで、相手を理解する楽しさを感じるとともに、進んで関わろうとする思いが高まったことが分かる。

相手を理解する楽しさを感じるとともに、進んで関わろうとする思いが高まったことが分かる。

(イ) いいねポイントの効果的な活用による相手意識の変容

検証授業②(2月)では、単元の中で評価の3観点を網羅できるよう、第2時では「相手と向き合う」、第3時では「伝え合う」、第4時では「相手を知る」を目指す関わりの姿として設定した。第2時に初めて、系統立てたいいねポイント表について前時の児童の振り返りカードの記述「意味を考えながら聞くのは難しかった」などを例に挙げながら、具体的な様子が伝わるように説明した。いいねポイント表の3つの観点「相手と向き合う」「伝え合う」「相手を知る」を通して、相手と分かり合える体験ができること、それが外国語活動のよさであることを伝えた。

授業中は、相手の目を見て話を聞いている姿、話を聴こうとして相手に耳を傾けている姿などいいねポイントを活用している児童に声かけをした。プリントを “Here you are. ” と言いながら配ったときに “Thank you. ” と答えてくれた児童の姿のように、相手への思いを表現できている姿をできるだけ見て取り、目指す関わりの姿に沿った言葉掛けをした。

具体的な関わりの姿を知ること、次頁表2の振り返りの記述のように、丁寧な関わりをしようとする姿が多く見られるようになった。下線部は児童が選択したいいねポイント、波線部はそれを

活用して体験したことにより得られた気づきである。

表2の振り返りの記述を見ると、「目を見るとたくさん話ができる」「ゆっくり話すとスムーズにできた」「みんなの夢が分かった。夢に向かっがんばってほしい」などのように、いいねポイントを活用することで、気持ちのよい関わりになったり、相手との関わりを楽しんだりしている様子が分かる。そして、相手の思いを認めようとしようとしている様子もうかがえる。

表2の自己評価の欄は、いいねポイントを活用した関わりができたかを活動後に3段階「できない」「できる」「よくできる」で振り返らせたものである。「できない」の児童はいなかった。

「よくできる」は第2時で52%、第3時で76%、第4時で96%と増加している。

このことから、いいねポイントが児童に浸透していたこと、また、自分に合わせて選択させたことにより、それを活用して相手と気持ちよく関わろうとする意欲を高めたことが分かる。

検証授業①(11月)事前、検証授業

②(2月)事前、検証授業②(2月)事後の意識調査を見ると、「相手に分かりやすく伝えようとする」は、検証授業②(2月)事後では、全員が肯定的な意見になり、「思う」の割合は検証授業①(11月)事前と比べると2倍になっている(図6)。これは、いいねポイントを活用することで、相手に思いを分かりやすく伝えたり、相手の思いを聴いたりする体験ができたからであると考えられる。つまり、ただのことばのやりとりではなく、その関わりに思いを込めることができたことで、相手を受け止めようとする思いが高まってきていると考えられる。

イ 抽出児(B, C群)の変容について

事前アンケート調査を基に、相手を知りたい意欲、慣れ親しんだ表現を使って伝えようとする意欲により4つの群として考えた。

表2 いいねポイント自己評価(児童25人中)

時	第2時		第3時		第4時	
観点	相手と向き合う	人数	伝え合う	人数	相手を知る	人数
いいねポイント	目を見る	5	聞き慣れる	7	分かる	16
	笑顔	10	話そうとする	4	自分と比べる	5
	うなずく	3	わかりやすく伝える	13	よさが分かる	4
	考えながらきく	7	やりとりを続ける	1		
振り返りの記述	<ul style="list-style-type: none"> ・うなずいて聞く気持ちがいい。 ・英語の意味を考えると相手の思いや考えが分かる。 ・相手の目を見て話を聞けば、自然にうなずくことができる。 ・考えながら聞くと分かりやすい。 ・目を見るとたくさん話ができる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ジェスチャーやゆっくり話すとスムーズにできた。 ・友達に夢を答えるときに相手に自分の夢がきちんと伝わるようにがんばった。笑顔で聞けたし答えられたのでよかった。 ・先生や友達が言っていることをきちんと聞けた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の夢と比べることができた。人それぞれの夢があるな。 ・みんなの夢が分かった。夢に向かっがんばってほしい。 ・何になりたいのか理由までしっかりと聞くことができたし、わかることができた。 	
自己評価	よくできる	52%	よくできる	76%	よくできる	96%
	できる	48%	できる	24%	できる	4%
	できない	0%	できない	0%	できない	0%

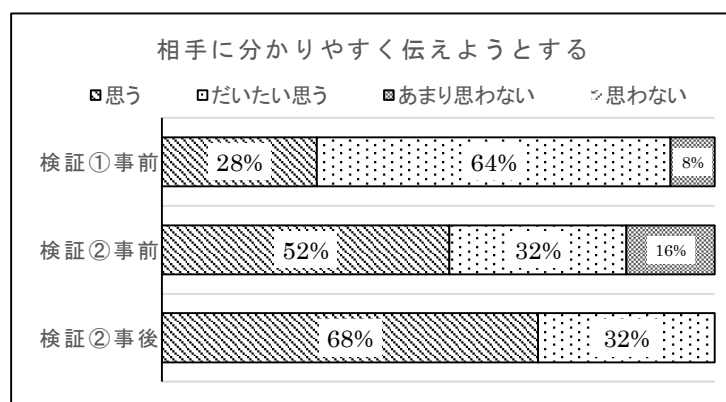


図6 アンケート結果②

(7) 十分に聞く活動を取り入れ、自然に表現に慣れ親しませるための「きく」活動の設定(表3)

表3 b児への手立てと振り返りの記述

プロフィール	B群(知りたい○, 表現△)		
	b児は友達との関係を作ることに抵抗は感じられない。外国語活動の事前アンケートでは、慣れ親しんだ表現を使って伝えようとすることに自信がないと答えている。		
時	第2時	第3時	第4時
いいねポイント	(笑顔) 隣の人とペアを組んでビンゴをしました。笑顔で話しができてよかったです。	(分かりやすく伝える) 分かりやすく伝えていて相手がうなずいてくれたから嬉しかった。	(相手のことがわかる) ぼくが話をしているときみんな真剣にきいてくれて嬉しかった。
手立て	振り返りでいいねポイントの記述を発表させる。	友達に尋ねる場面では、近くで支援をする。	夢宣言をする場面では、近くにいて互いのやりとりがスムーズになるような橋渡しの役割をした。
振り返り	最後のビンゴで先生たちがなりたかったものがよく分かった。ぼくも夢があるのであきらめずに叶えたい。	今日は将来の夢を当てることをした。意外な夢もあった。ぼくは、〇〇さんの夢の cook のカードだった。	班の人の夢と理由が分かった。みんなとてもいい夢だったからあきらめずにがんばってほしい。

第2時の先生になりきって答える場面では、友達とペアで〇〇先生の夢は“artist”と答えることができた。ペアで伝えたことにより、抵抗なく言えたようである。振り返りの時間には、b児が決めたいいねポイントについて書いた記述「ペアを組んでビンゴをした。笑顔で話しができてよかった」を発表させた。みんなに紹介したことにより自信がもてたようであった。

第3時「誰の夢かな」では、自分がもらった友達の夢カード“cook”を見て、誰のことか考えていた。周りを見回して、誰のものなのか分かると、その友達の所へ行き“Hello. What do you want to be?”をはっきりと話していた。相手が何と答えていいか戸惑っていると「自分の夢を言って」と教える様子も見られた。また、一人で相手に話す場面でも、表現を使って関わろうと挑戦していることが見られた。この時間の様子から、表現への自信が少しついてきていることがうかがえた。

第4時「夢宣言をしよう」では、率先して“What do you want to be?”とグループの友達に尋ねていた。友達が夢を語る場面では、相手の話に耳を傾けて聞きとろうとしている様子が見られた。自分が宣言するときは、「人を助ける仕事をしたいから消防士になりたいと思う」と話した。指導者は、話を聴いている児童に「b君の夢がわかったね。何か返さなくていいかな」とやりとりが続くための橋渡しをした。それを聞いた児童は「なぜ空手の道着を持ってきたのですか」と、b児の道着を指さした。b児は、道着を持ってきていながらも、そのことの説明はしていなかったからである。b児は「人を助けたいと思ったきっかけが空手だったからです。空手を始めて、人を助けるような職業に就きたいと考えました」と道着を見せながら答えた。指導者は「それを聞いてどう思った」とグループの相手に尋ねた。すると、「なぜ道着があるのかがよく分かった」という返答であった。このように、児童同士のやりとりを効果的にするためのクッション的な役割を指導者が果たすことで、相手への気付きをより深めることができていた。表3の下線部よりb児が相手との関わりを通して、自分を見つめたり相手に心を寄せたりするきっかけになり、その関わりを楽しんでいる様子が分かる。

表4は、検証授業②(2月)事前事後の意識調査でb児が「自分のことを表現することに自信がある」「分かりやすく伝えようとする」の項目に4段階で自己評価したものを表したものである。自分の考えを表現することや分かりやすく伝えることに自信をもってきている(表4)。表現に慣れ親しめたことにより、自分のことを伝えるとともに、相手を理解する思いが広がっていることが分かる。

表4 b児の事前事後自己評価

時期	自分のことを表現することに自信がある	分かりやすく伝えようとする
事前	① 2 3 4	1 ② 3 4
事後	1 2 ③ 4	1 2 3 ④

(イ) 心を寄せて聴くための内容の吟味(表5)

表5 c児への手立てと振り返りの記述

プロフィール	C群(知りたい△, 表現△) c児は自分への自信のなさがうかがえる。そのため、相手との関わりに積極的になれないように見えるところがある。将来の夢を決めかねており、揺れ動く心の様子を見守った。		
時	第2時	第3時	第4時
いいねポイント	(考えながらさく) やっぱり考えながら先生の話さきくことはあまりできなかったけど、楽しかった。	(聞き慣れる) ちゃんと先生の話聞いてスムーズに動けた。	(自分と比べる) みんなと比べて1年生からずっとその夢の人もいれば6年生になってから決めた人もいるのだなと思って楽しかった。
手立て	振り返りの時間に記述を発表させる。	事前に夢について相談にのる。友達に尋ねられる場面では近くで支援をする。	事前に夢が決まったことについての話を聴く。夢宣言では友達の話聴いている様子を賞讃する。
振り返り	先生方の子どもの頃の夢がわかったので楽しかったし、みんなでふれあいながらできたのでよかったです。次も楽しみです。	今日のゲームのとき、〇〇さんと〇〇さんに行って、その人たちのなりたい職業が分かってすごくおもしろかったです。	3班で同じ夢の人は、どちらが有名になるのかと楽しくできたし、次は一人でやってもできるという自信がついた。

第2時では、聞き取れる単語に反応している様子が見られた。今日のめあてを伝えると「先生方の夢を知りたい」と話した。「なりきりビンゴ」では、先生方の小さい頃の夢をペアで予想し、カードに記入する際には、「〇〇先生にしよう」「多分〇〇先生の夢は探偵だよ」と話すなど意欲的に考える様子が見られた。振り返りの時間にはc児の記述を発表させた(表5下線部)。「みんなとふれあいながらできたのでよかったです」と成功体験を伝えたことが、自信になったようである。

第3時では、「世界の友達の夢」で日本のトップ3は何かを予想し答えていた。「誰の夢かな」では、カードに記入された夢を見て、「これは、〇〇ちゃんのことだ」と話し、自主的に行動している様子が見られた。c児は、自分の将来を決めかねている。授業の事前に2人でどのような職業になりたいかを話し合った。その結果、今は具体的な職業は決められないが、優しい人になりたいという気持ちを確認し、“kind person”に決めた。「誰の夢かな」は、具体的な職業名を伝え合う活動であった。c児は友達から“What do you want to be?”と尋ねられ“kind person”が出てこなかった。c児の近くにいた指導者に、「先生、ぼくの夢は英語で何ですか」と尋ねることができた。“kind person”という言い方を知り、安心した様子で“I want to be a kind person.”と相手に答えていた。指導者は、c児がなんとかして伝えようとする意欲が見られたため、その関わりを称讃し自信につなげようと考えた。

第4時では、c児は授業前に自分の夢が決まったと話した。夢を説明する道具としてサッカーボールを持ってきた。グループでの夢宣言をしようでは、「サッカー選手になる」と伝えた。夢を決めるという視点で友達と自分を比べた様子が分かる(表5下線部)。友達の夢を知り、自分の夢を伝えたことで、夢に対する思いが膨らんでいる。また、相手のことを知りたいと思って活動できたことや楽しい関わりになったことが自信となり、自分を相手に伝えたい思いも高まっている。

ウ 単元を積み重ねての変容と考察

振り返りカードへの記述を相手意識に関する観点に応じて分類した(表6)。第2時では、「共通点や相違点」が56%で、記述内容は「〇〇先生の夢が意外だった」「自分の夢も実現するといいな」である。「夢がかなった先生はすごい」のように相手を受容した記述も見られた。第3時では、「夢が変わる人も変わらな

表6 気づきの深まりに見る相手意識の変容(児童25人中)

観点	第2時	第3時	第4時
共通点や相違点	56%	48%	20%
多様性	4%	28%	16%
相手への受容	4%	12%	64%

い人もいた。みんなそれぞれだな」のような「多様性への気付き」が28%、「みんなの夢、自分の夢がかなうといいな」と「相手への受容」が12%であった。第4時では、「〇〇君の姿がかっこよかった。一番実現しそうだ。ぼくも夢に向けてがんばるぞ」「みんなよく聴いてくれた。〇〇さんを応援したら、“Thank you”と答えてくれた」のように「相手への受容」が64%と多くなった。単元が進むにつれて、相手を知る、みんなのことが分かる、相手のよさが分かると段階を経て相手を理解し、相手を受け止めようとする気持ちにつながっていると考えられる。

エ 事前事後アンケートに見るコミュニケーションに対する考え方の変化

検証授業②(2月)の事前と事後に行った意識調査「外国語活動のコミュニケーションで大切なことは何か」(自由記述)では、次のように回答している(表7)。事前の回答には、「ジェスチャー」や「目を見る」「笑顔」などがあり、相手意識に関することばは出ているが、まだ、自分の気持ちを中心にやりとりをしようとしている段階である。事後では、「相手の立場になって表現したり聴いたりすると気持ちよい」「相手が話してきたら返事を返す。相手がどういうふうに言っているか考える」などのような、具体的なやりとりの場面を想定した回答があり、28%から92%と多くなった。「相手に伝えようと思う気持ち、相手を知ろうと思う気持ち、相手を思いやる気持ち、互いを思いやる気持ち」という回答もあり、互いに聴き合う体験をしたからこそ、どうすれば相手の思いを受け止められるかを考えた結果であると考えられる。

表7 コミュニケーションで大切なこと
(児童25人中)

項目	事前	事後
ジェスチャー笑顔などの単語で	72%	8%
具体的なやりとりの文で	28%	92%

ある児童は、「1笑顔・笑顔だったら相手が気持ちよく話せるから、2話そうとする・話そうとしてコミュニケーションをつくる、3相手のことを知る・相手のことを知ってもっとなかよくなる」と回答していた。これは、相手意識を高めていくための手順のように考えられる。このような思いをもって、人と関わろうとする児童を育てられるような活動をこれからも続けていきたい。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究を通して、外国語活動における目指す関わりの姿を系統立てた評価規準「いいねポイント」を活用して明確にし、心を動かすような内容と「聞く」から「聴く」につながるような単元構成をする。このことにより、次のようなことが明らかになった。

- ・ 「聴きたい」「伝えたい」と心を動かす内容を設定し、スモールステップで表現に自然に慣れていく単元構成を行えば、相手を受け止めようとする態度を育てることができる。
- ・ 目指す関わりの姿を指導者と児童が共有できる系統立てた評価規準を活用することにより、相手を大切に、相手を受け止めようとする態度に支えられた関わりが生まれてくる。

(2) 今後の課題

- ・ 目指す関わりの姿に近付くための評価の在り方

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 平成20年8月 p. 7
- 2)3)5) 岡 秀夫, 金森 強編著 『小学校外国語活動の進め方』 2012年4月 成美堂 pp. 85-115
- 4) 金森 強著 『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣』 2011年6月 成美堂 pp. 192-193